

## P-2 無麻酔下でのオトスコープ検査時の看護師の保定について

○伊藤千夏 松村恵 木村里奈 青木理紗 竹尾記子 中村泰治  
小滝橋動物病院グループ 目白通り高度医療センター 東京都豊島区

### 序文

外耳炎治療において有効な検査方法としてオトスコープ(Video Otoscope)がある。オトスコープは麻酔下、無麻酔下で耳道内に硬性鏡を入れ画面上で耳の中を観察・耳道の洗浄ができる。耳鏡を使用するよりも明瞭に観察することができる。無麻酔下で行うことで動物への負担の減少や麻酔リスクのある症例にも使用ができ、飼い主にとっても簡便な検査方法である。保定が適切でないと動物の耳道・鼓膜を傷つけオトスコープ本体の破損に繋がる。今回は、無麻酔下における動物種・犬種ごとのオトスコープでの耳の保定方法を報告する。

### 材料および方法

①マズルの長い小型犬～中型犬：柴犬・トイプードルなどを挙げることができ、方法としてマズルを片手で固定しもう片方の手で後頭部を保定する。肩も使い3点で固定すると犬が頭を動かすのを予防できる。体を動かすのを防止するため犬の腰を、後頭部を支える腕の肘で固定する。前肢が動いてしまう犬であれば前肢を持つ保定者を用意すると良い。第三者がいない場合はタオルなどを利用して前肢などで顔を保定する手を払われないようにする。

②マズルの短い小型～中型犬：短頭種はマズルが短く、掴む場所がなく保定が困難である。しかしポイントを押さえることにより保定が可能となる。また、短頭種は外耳炎のなりやすさ、悪化要素として耳道の狭さがある。代表的な犬種としてフレンチブルドッグ・パグ・シーズーなどを挙げる事ができる。保定のポイントは犬種の目の位置にもよるが頬骨を支えるように片手で押さえ、自身の肩に顔を押し付けるのが良い。また、片手で後頭部を支え後頭部を支える方の腕の肘で腰を固定する。短頭種の場合、頬骨を支える手の指の爪等で動物の角膜を傷つける様な医療事故が起きないように注意する。

③怒る犬：外耳炎を患う犬は、耳道の痛みで耳に触られるのを嫌がる傾向にある。その場合、保定者・獣医師が噛まれてしまう事故も想定される。この場合は鎮静や麻酔をかけての観察・洗浄を行うことも検討する。麻酔・鎮静をかけずに観察・洗浄ができる方法は、エリザベスカラーを装着しエリザベスカラーの間から片耳ずつ耳介を出し耳道内の観察、洗浄を行う。体の固定は片腕でエリザベスカラーと頭部を固定し、もう一方の腕の肘で腰を固定する。

④猫の保定：性格に合わせて保定選択することを勧める。固まって動かない猫であれば、体と頭部が一直線になるよう支えるのみでよい。動いてしまう猫はタオルや洗濯ネットに入れて耳のみを出し観察する。攻撃的な猫であればエリザベスカラーを用意し片耳ずつ耳を出し観察すると良い。どうしても保定が難しい猫であれば鎮静、麻酔処置を検討する必要がある。

### 結果・考察

ポイントを抑えて保定することで保定の質が上がり、技術の均一化を図ることができ、新人の保定の指導がしやすくなると考えられる。また無麻酔下で行うことにより獣医師の円滑な診療の補助、動物の負担の減少・安全に繋がる。